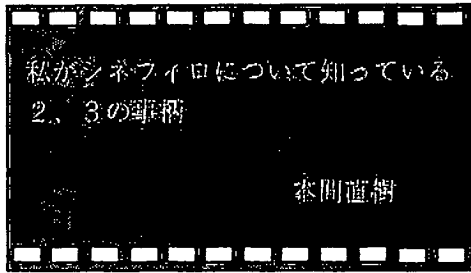


Title	私がシネフィロについて知っている2、3の事柄
Author(s)	本間, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 45-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71178
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



シネファイロは

面白い——これが最初の感想。私はバリで多くの哲学カフェを経験したが、これといった方法論もないまま、司会者の力技がなければカオス状態に終わってしまう後者に比べ、シネファイロでは人々はスムーズにテーマ映画の核心部分とそれを支える種の観念に触れることができる。どうしてだろうか？

ラミレス氏が適確に述べているように、映画をみることはまされもなく一つの経験だ。哲学カフェにはそれが欠けている。有り体に言えば、方法論なしの哲学カフェは参加者の「妄想」の捌け口となる。それは具体的な経験でも明確な概念でもない混乱した観念だ。そもそも自分の経験を距離をおいて記述することは難しいうえに、さらに事後的に多数で共有することは一層困難だ。そのためには文学的な能力や聴取る技法が要求されるし、自分の経験を曝し出す発言者にもリスクがかかる。

参加者の具体的な体験の記述をもとに議論する（「ネオ」ソクラテス的対話（ソクラテイク・ダイアローグ）という方法がある。人々が魅了されるのは、言葉による経験の記述の層とそれを支える諸観念の層が見事に析出される瞬間がそこに生じるからだ。うまくいったシネファイロには同様のことが、いやそれ以上を見いだすことができる。まず参加者全員が二時間ほどの経験を共有する。これはソクラテス的対話にはないメリットだ。そして映画の後で参加者が映画を言葉で記述する。それは解釈学的な作業であり、一つの動作、一つの映像を理解するための解釈や観念の枠組みが問われることになる。もちろん司会者の技量によることも大きい。カフェуйロ的な漂流ないし空中戦にならないのは、準拠すべき経験が厳然とそこにあるからだ。題材なしの哲学的対話が終わるとするに忘却さ



パリ留学中の本間講師と愛犬まめ

れてしまおうのに対して、映画の経験そのものは
その後も私たちの経験の一部として生き続ける。
それだけに上映直後のこの時間は経験の吟味す
る哲学にとって大変貴重なのだ。

もう一つ比較のためにパリでしばしば開かれ
る映画作家を招いての上映会をあげておこう。
観客にとっては映画作家は文字どおり「創造主」
の位置にあり、両者の間に交わされる言葉は一
方通行で、発言内容も良くも悪くも「マニアッ
ク」だ。撮影の苦労話や作家の意図などを聞くに
ついても、一度出来上がった作品にとって作家
はもはやその「外部」に位置するのだと思いきら

される。

ところで、私のたつての希望で、是枝裕和監督
作「ワンタフルライフ」のシネフィロが実現し
た。死後に天国に向かう中継地点で死者たちが
生前の一瞬を選択し、それ映画によって再現し、
その映像の記憶をもって彼ら彼女らは昇天する。
「人生」と「映画」の並行関係を見事に描き、「一
つの瞬間を永遠に生きる」というきわめてニー
チエ的な主題を扱った作品ではあったが、よく
理解できなかった観客も多かったようだ。キリ
スト的世界観をもつ参加者の一人は、人生はよ
り幸福な未来向かうプロセスであり、一瞬だけ
を選ぶことはナンセンスであると主張し、別の
参加者は、どうして死を迎えた後の人たちがな
ぜあのように平然としているのかが分からない
と述べていた。

蛇足ながら、最後にパリの哲学カフェ事情に
ついて一言。正直なところ、パリの哲学カフェは
病んでいる。より正確には、動けないでいる。哲
学カフェの数は減少し、参加者は固定している
うえ（多くは定年退職者）、参加者が平等に発言
できることはいまや検証の必要のないイデオ
ロギーになり、司会者の技術や方法も吟味や評
価のないまま個人芸に終わっている。大学の職
業哲学者はカフェフィロを見下し（無視し）、カ
フェフィロフリークは「知識人」を毛嫌いしてい
る。（ラミレス氏は哲学の方法と理論を重視し、
哲学カフェの社会のなかでの機能を考えるべく

例外的な存在だ。）大学の専門家が音頭を取って
カフェフィロを聞くという日本の現状は彼ら彼
女らにとっては驚愕の対象であるといつてよい。
しかし、今後哲学カフェをどこで、どのような方
法論で、どのような人たちと行うのか、私たちの
課題は大きい。

（ほんまなおき）